

浄瑠璃・世話物

「**心中天の網島**」

◎初演 享保五（一七二〇）年十二月六日 竹本座

「人間の純粹な愛情が、悲劇につながり…」

あらすじ

上之巻

（大坂曾根崎新地河庄）

茶屋河庄で、

侍の客に呼ばれた遊女小は

るは、侍の親切心にうちとけ、妻子もある恋人・紙屋治兵衛との心中の話と、その約束をほごにする相談をしてしまう。外で話を聞いていた治兵衛は、怒って障子越しに刀を突き刺すが、実はその侍は治兵衛の兄孫右衛門で、弟が入れ込んでいる相手を見届けるために来たのであった。治兵衛は小はるの心変わりを恨み、別れる覚悟がつく。

中之巻

（天満屋紙屋治兵衛内）

小はるが請け出されるとのうわさを聞いて、孫右

衛門と、治兵衛の妻おさんの実母（治兵衛のおば）が、紙屋の家を訪れ治兵衛を問い詰める。治兵衛は、それは恋敵の太兵衛の仕業と否定するので、二人は帰る。その後、小はるの裏切りにふとんの下で悔し涙を流す治兵衛の姿に、おさんは小は



るが自分に義理立てし、ひとりで死ぬつもりと悟る。そこで小はるの心変わりには「別れてほしい」と書いた自分の手紙のせいであることを打ち明け、自ら小はるを身請けする金を用意する。そこに、おさんの父五左衛門が現れ、離縁を迫った上彼女を連れ去る。

下之巻（蜷川新地大和屋く名残の橋づくしく網島樋の口） 丑三つ時、兄孫右衛門らが探しに来る中、治兵衛は身を隠し、示しあわせたように小はるを連れ出し、道行に出る。梅田橋から緑橋…蜷橋…そして天満橋…いくつもの橋を渡って、やがて最期の地網島へと二人はたどる。

見どころ 享保五（一七二〇）年の冬、大坂曾根崎新地の遊女小はると紙屋治兵衛が網島で死んだ心中事件を、近松がすぐ筆をとり竹本座で上演した作品です（三日後には早くも舞台にかけられたという話さえ伝わっています）。この作では、各登場人物の個性豊かな人間像を見逃すことはできません。中でも、小はるとおさんの女同士の義理の描き方は、胸に迫るものがあります。人間の純粋な愛情が、世の中の制約によって悲劇へとつながって行く経過をこまやかに表現しており、有名作の多い近松の世話物のなかでも、芸術性の高い最高傑作との評価を得ています。